

# みんなのジュニア生態学講座

- 高校生と若手研究者の交流会 **オンライン** -

2024年3月17日(日) 15:30-17:00



吉田 誠 (東京大学)

## バイオリギングで 知る魚の生態

物心ついた頃から、生き物の図鑑を読むのが好きだった。写真やイラストを眺めるだけでなく、解説文も夢中になって読み込んだ。都会住みゆえに野外で実物を見る機会はなく、知識ばかりを詰め込んだ、頭でっかちな「生きもの好き」。小学生の頃に、祖父に連れられて行った海釣りでも、水面から潜ろうと身をひるがえした魚のきらめき、躍動感が魅せられた体験が、研究者を志したきっかけだった。魚の研究と一口に言っても、魚を生きたまま扱う学問分野はじつは多くない。水中を泳ぎ回る魚の生き様を、そのままの姿で知る方法はないだろうか？「魚の研究をしたい」との思いを漠然と抱え、中学・高校で理系を選択、大学進学後に農学・水産系の学部・研究室を選んだ私は、卒論を控えた大学4年の夏、動物に小さな装置をつけて行動を調べる「バイオリギング」に出会う。バイオリギングで使うのは最新鋭の電子装置だ。しかし、装置を魚に取り付け、実際にデータを手にするまでの過程は実に地味で、根気と忍耐の試される地道な調査が続く。

「魚たちは、いつ、どこで、なにをしているのか」素朴でシンプルなこの問いを胸に、ハイテク機器を片手に水辺に繰り出し、魚を追いかけて続けてようやく垣間見ることのできた、かれらの知られざる暮らしぶり。本講演ではその一端を紹介したい。



寺田 佐恵子 (玉川大学)

## 豊かな自然と 人々の笑顔を未来に

私は修士課程まで生態学を学んだ後、日本のODA実施機関である国際協力機構 (JICA) に就職しました。JICAではアフリカ駐在・海外出張・保全プロジェクトの担当など、憧れていた仕事を経験できたのですが、現場で活躍される専門家・研究者の方々に、自分もこんな風になりたいという思いが強くなり、退職して博士課程に進学し直しました。

5年ものブランクを経て研究を再開するのは楽ではありませんでしたが、ご縁と運に恵まれ、憧れのアフリカの地で調査を行い、大型類人猿ボノボの生態や生息地の植生についての研究で学位を取ることができました。

また、その間には、再度研究を中断し、環境省で2年間職員として働き、ワシントン条約という希少な野生生物の取引管理を行う条約や関連国内法を担当しました。当時は予期しなかったことですが、その後も同条約の勉強を続け、現在は有識者として省庁との仕事を継続しています。

保全にはさまざまな分野の知見が必要であり、一見遠回りのような経験や人の縁がつながる場面も多々あります。発表では、このような行政とアカデミアの行き来からの学び、研究を続けるための試行錯誤、現在取り組んでいるアフリカでの野生生物の保全と人々の暮らしの両立のための研究の展望などを紹介したいと思います。



宮崎 祐子 (岡山大学)

## 山の実りの豊凶と その影響を知りたい

みなさんは、今年はスギやヒノキの花粉量が多いとか、山のドングリが不作で人里にクマが下りてくる、といったニュースを見聞きしたことがあるのではないのでしょうか。こうしたニュースは、植物が咲かせる花の量や種子の量が毎年大きく変動することが事の発端にあります。私は、このような花や種の量が年毎に大きく変化する現象がどのようにして起こるのか、そしてできる種子の量が変化した時に、そこから生まれる芽生えにどのような影響があるのかということに興味を持って研究をしています。

花や種子の量が年毎に変化する現象に興味を持ち始めたのは、高校生の頃でした。ポルネオ島の熱帯雨林で一斉開花と呼ばれる数年に一度だけ大規模な開花が起こる現象について調べる研究プロジェクトが始まったことを知り、強く惹かれたことがきっかけです。ところが大学に入学してみると、「そんな遠くに行かなくても面白いことはいっぱいあるで」と学生実習の帰りの車で偶然同じボックス席に乗り合わせた先生から言われ、目が覚めたような気持ちになったことをよく覚えています。

その出会いをきっかけに、その先生の指導のもと、温帯での樹木の開花と結実の研究がスタートしました。今回はそういった現在の研究にたどり着いたいきさつや、研究を進めてわかってきたことなどについてお話しできればと思っています。